

詩編 119:33~40

マタイによる福音書 9:27~31

今日の聖書には、二人の「目の不自由な人」が出てきました。この二人がイエスさまによって見えるようにさせられました。聖書には、神さまによって「目を開かれて」新しく生きていく人たちのことが、たくさん記されています。

詩篇 119 篇にも、このような祈りの言葉があります。

「わたしの目の覆いを払ってください」

「むなしいものを見ようとするところから／わたしのまなざしを移してください。」

私たちの目は、覆いがかげられることがあります。むなしいものばかりを見ようとしてしまいます。肉体の目に見えていることを超えた、神様の事実に目を開かれること、それが信仰生活に大切なことなのだと思います。

私たちはイエスさまをこの目で見たことはありません。けれどもペンテコステ以来、聖霊によって目を開かれた多くの人たちが、ご復活の主を証しし、神さまの恵みの事実を確かに見させられながら、キリスト教会は発展してきました。主の弟子たちにくだった同じ聖霊が、私たちにもくだって、私たちも目を開かれます。そして神さまの事実・真理を見つめさせられる者とされるのです。これは聖霊、つまり神さまがなさることです。

与えられているマタイ福音書 9・27。この時イエスさまは、カファルナウムの町にいらっしゃいました。9：18を見ますと、「ある指導者（他の福音書では会堂長ヤイロという人）」の家で、亡くなってしまったお嬢さんを生き返らせるというみ業をなさいました。そこから28節にある「家」に帰る途中でした。この「家」というのは、イエスさまが活動の拠点となさっていたペトロの家だと思われます。この家にお帰りになる途中、二人の目の不自由な人が「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と言いながら、ついて来たのです。

イエスさまは29節でこうおっしゃいました。「あなたがたの信じているとおりになるように」。すると彼らの目が開かれました。これは、単なる癒しの出来事ではなく、信仰の出来事だったのです。

それでは信仰とは何でしょうか？ 今日の二人のどこに、信仰があったのでしょうか。

実は、叫びながらついて来る二人にイエスさまが向き合われたのは、28節にあったように、家に入ってからなのです。ということは家につくまでずっと、イエスさまは二人の願い・祈りに対して、沈黙なさっていたままだったのです。

祈りには、主が沈黙したままの期間がある。このことを、聖書は伝えています。必死の願い・祈りに対して、神さまが沈黙したまま。それはつらいことです。今日の二人は、イエスさまの沈黙の間も、ずっとイエスさまについていきました。大切なのはその後です。

家に入られたイエスさまは、二人にお問いになりました。

「わたしにできると信じるのか」。

この問いは、イエスさまが、私たち一人一人と向き合って、私たちの目をじっと見つめながら、今、語

りかけていらっしやる問いです。「わたしにできると信じるのか」。

信仰者であり続けるというのは、この問いを受け続けていくことなのかもしれません。私たちは、「ダビデの子よ、私たちを憐れんでください」という叫びに似た思いを持ちます。「神さま、私を助けて下さい、わたしの家族を助けてください」と願い、祈ります。その祈りに、神さまはすぐに応えてくださる時があれば、沈黙なさったままの時もある。それは、神さまの定められた「時」があるからです。神さまだけがご存じの「最善の時」に、神のみわざが行われる、いえ、神さまのみわざはずっと行われ続けているのですけれども、私たちがそれに気づくのに、時があるのです。

今日、イエスさまは家に入られてから「あなたはわたしにそれができると信じるのか」と、面と向かって二人に問われました。

あなたの人生には、今、祈りの課題がある。あなたは、私にそれができると、本当に信じていますか？

わたしたちはそのようにイエスさまに問われています。

「神さま、助けてください」と願うことと、神さまにはそれができると信じることは、別です。願い求めるのは、神を知らない方々も、そうしています。神さまを知っているわたしたちは、神さまにはできると、信じて、願い求めているでしょうか。

あなたの人生には、今、祈りの課題がある。あなたは、私にそれができると、信じていますか？

今日の二人は、その問いに対して、「はい、主よ」と答えました。「はい」・・・それだけです。クリスマスとき、マリアが「お言葉通りになりますように」とただ一言、言ったように、今日の二人が答えたのは、「はい」という一言のみでした。

この「はい」という一言は、イエスさまが、引き出して下さったのです。「わたしにできると信じるのか」という主の問いは、私たちをテストする問いではありません。私たちと向かい合ってくださいる主のお姿、主のまなざしは、私たちを包みこむ圧倒的な愛にあふれたものなのです。私たちは、主の愛のまなざしに包まれて、ただ一言「はい」と答えることができます。そして私たちのただ一言の「はい」を、イエスさまはしっかりと受け止めて、それを私たちの「信仰」と呼んで下さるのです。「あなたの信じているとおりになるように」とおっしゃって、主は二人の目を、開かれたのでした。

私たちは、イエスさまによって目を開いていただかなければならない者です。そうでないと、私たちは見るべきものが見えない、詩編の言葉で言えば、むなしいものばかりを見ようとする者です。一番あわれなことは、神さまが私たちを愛して下さっていることが、見えなくなってしまう者なのです。

私たちの姿は、アダムとエバ以来、今もずっと続いているあわれな罪びとの姿です。にもかかわらず神さまは、罪びとを愛することをおやめになりません。罪びとがご自分の愛に立ち返ることをあきらめずに、私たちの目を開いてくださるために、ひとり子イエスさまをこの世にお送りくださいました。

先ほど、マリアのことを申しました。マリアは、天使ガブリエルから「あなたは救い主を生みますよ」という知らせを受けます。マリアは「そんなことはありません」と戸惑いますが、天使は「神にできないことは何一つない」と告げました。「あなたという小さな者を通して、神さまが大きな救いのみわざを行おうとしておられます。あなたと共に神がおられる。あなたは恵まれた人なのですよ」と告げられた、神さまの事実を、マリアは「お言葉どおり、この身に成りますように」と受け止めたのでした。

マリアも、今日の二人も、「人間にできることではないが、神にはできる」という、神さまの事実

を、受け入れました。できるかできないかは、私たちが決めることではなく、神さまがお決めになることです。そして、わたしたちの救いのために、神さまの愛のみわざが貫かれるために、「神にできないことは何一つない」のです。

30節「二人は目が見えるようになった。イエスは、『このことは、だれにも知らせてはいけない』と彼らに厳しくお命じになった」とありました。この時にはまだ二人は、神さまのみ心の全体を理解できていなかったのです。ですからイエスさまは、「だれにも知らせてはいけない」とおっしゃいました。

しかし31節「二人は外へ出ると、その地方一帯にイエスのことを言い広めた」。喜びのあまりだったと思います。見えなかった目が見えるようになったのですから。

けれども、このようなことの積み重ねで、自分に都合のよい救い主のイメージが告げ広められてしまっていて、イエスさまはやがて十字架へと追いやられてゆかれるのです。

イエスさまは、ものすごい奇跡を行うことで、救い主ではなかったのです。イエスさまはこの後、ユダヤの指導者たちに嫉妬され、捕らえられ、侮辱され、あざけりを受け、裁判にかけられても何も言い返すこともなさらなかった。弱さの極みにその身を置かれました。そして「こんな負け犬のような救い主なら要らない」と人々から捨てられ、十字架の上で死んでゆかれました。イエスさまの十字架の死は、「イエスを十字架につける！」と人々が叫んだ、その大声が勝利したように見えた出来事でした。私たちの肉体の目で見れば、そうとしか見えない。けれども、神さまの目から見れば、イエスさまの十字架の死は、私たち罪びとが赦されて神の子とされるといふ、救いの出来事だったのです。

イエスさまを通して、本来ゆるされざるものがゆるされるという、大いなる逆説がそこにありました。主の苦難は勝利に至る。十字架の屈辱は栄光に至る。今日の二人には、このことがまだ分からなかったけれども、今、わたしたちは聖書を通して、神さまの救いの真実を知らされています。そしてこの神さまの真実をこそ、告げ広めるよう、背中を押されているのです。

特別に平和を願い求める8月。そしてわたしたちの毎日の生活で、時には「どうして神さま、黙ったままなの？」と思う時があるかもしれません。それでも、今日の二人のように、イエスさまの家まで、ついていきましょう。教会はイエスさまの家です。礼拝は、イエスさまにお会いするところです。この礼拝で、「わたしにできると信じるのか」と、イエスさまはお問いになります。「はい」という一言を、与えてくださるように、聖霊の導きを祈りましょう。

恵みを受けて、新しい1週間も、ご一緒に歩んでまいりましょう。